

竹中清一
川上雅 共著

日本商業史

安岡重明

第二次大戦後約十年間は、商業史研究が不振であった時代である。昭和十年代の思想統制の強烈であったころ、日本社会の基礎的な分野に対する研究が停滞してしまい、敗戦によって、研究の自由が回復してようやく、明治以来自由に論ずることの困難であった国家権力・天皇制・階級問題のほかに農業史・農村史に経済史学界の主力がそがれるようになった。こうした経済史研究の傾向は、流通史の分野に対する研究の不振となってあらわれたのである。しかし生産部門や階級関係に主力がそがれ、その分野では目をみはらせるばかりの研究の進展がみられたが、関連諸分野とくに流通史研究の跋行的な立ちおくれは、生産部門の研究の進展にブレーキをかける結果となった。すなわち、経済の再生産構造における生産という観点からすれば、流通部門の研究なくして生産部門の研究の正当な位置づけができないのに、流通部門の研究は、ひとまずそれまでの水準を与件としておいておき、生産部門の研究をまず進める形をとったのである。その欠陥を自覚し

た学界が流通史に精力をさきはじめてのは、大まかにいえば昭和三十年前後からである。生産部門を注視したため、農業史・農村史と密着している在郷商人、農村市場については、並行的にとりあげられてはいたが、三都をはじめとする都市商業にまで再検討が加えられるようになったのは、昭和二十年代おわりころ以降であるといつてさしつかえないだろう。こうした制約のため日本商業史の概説書も出版されることすくなく、豊田武『日本の封建都市』(昭和27)、古島敏雄『江戸時代の商品流通と交通』(昭和26)、宮本又次『日本商業史概論』(昭和29)が目につく程度であった。しかも専門家の手になるスタンダードな概説は、宮本教授の著書のみであり、その後も永く日本商業史の概説はかかれなかった。宮本教授の概説は当時の段階におけるもっともすぐれた概説であったが、それ以後十数年を経過している。この十数年間の新しい研究を加味した概説は、学界の待望するところであった。このような意味において、今回刊行された竹中・川上共著『日本商業史』を私はきわめて興味ぶかくよんだ。

二

本書は第一章単純な交換の展開、第二章商業の成立と発達、第三章近世における商業の発展、補論明治維新後の動向、からなり、全体で本文三〇六頁のうち二二三頁の七三パーセントの紙数が近世商業史にさかれている。だから本書はむしろ近世日本商業史ともいべき内容であることに気づくであろう。著者両氏がいずれも近世経済史を専攻する学者であるから、やむをえないともいえるが、せめて明治末までは本格的にとりあげてほしかった。本書

の中心が近世にあるし、こういう私自身も近世以外にはまったく無知であるから、この書評も近世の部分を取りあげることにした。近世の部分はつぎの構成をとっている。

- 一 商業政策と商業社会
 - 二 日本人の海外発展と朱印船
 - 三 鎖国下の貿易
 - 四 鑄貨と藩札
 - 五 両替商と信用体系
 - 六 問屋の成立
 - 七 問屋の形態と機能
 - 八 商人の企業精神
 - 九 商家の経営組織
 - 一〇 商家の帳合法
 - 一一 巨大商人の資本形成
 - 一二 株仲間と専売仕法
 - 一三 農村における商品流通と在郷商人
 - 一四 幕末貿易とその影響
- 右の構成からもわかるように、本書の特色は、貿易とか、貨幣とか、問屋制度とか、問題ごとに節をたて、その問題ごとに近世を通観する形をとっている。とりわけ力点がおかれているのは、私の印象では、信用体系、問屋制度、商人資本の存在形態（企業精神、経営組織、帳合法、資本蓄積）である。これらの部分と（一三）農村における商品流通と在郷商人は、最近十年あまりの間に相当研究が進んだ分野であり、その成果をとり入れた形になっている。この点あたらしい水準に立った概説としての特色を出しているこ

とにまず敬意を払いたい。とりわけ、大商人の経営史、帳合制度に多くの紙数をさき、江戸時代の企業形態をあきらかにしているのは、従来の類書にはみられなかった点である。この部分は現在の研究水準を十分反映している。また金融問題を信用制度の発達の観点から整理している点も、本書の特色をなす点であろう。しかしながら一方、幕末貿易をのぞき、問題ごとに節を立てる形に徹したため、一部に関連的な叙述はあっても、問題と問題との間の関連をつかむことが困難であり、かえって近世商業史全体の展望を見失なわせる結果になっていないであろうか。すなわち、幕藩制社会における商業あるいは商品流通の位置づけ、その段階的な展開についてこの著書から一定の展望をもつことは、きわめてむづかしいのではないか。近時の経済史研究、商業史研究は、当該社会における再生産構造にとりわけ注意を払い、流通現象を生産との関連において把握する努力をかたむけている。そのため商品流通の性格、その段階的な展開にむしろ神経質にすぎぬぐらいに注意をはらっている。それは経済社会の歴史をヴィヴィッドに把握するための試みであるから、特定の説に加担する必要はなく、また近世をこまかに段階区分する必要もないが、現在の学界動向の意図するところをくんで一定の段階論的な理解を示しておくべきであらう。それは、やはり商業・商品流通を商品生産との関連で把握することにつながる。私の本書に対する不満はこの点にある。この点を軽視しているから、戦後相当の成果をあげた農村の商品生産流通との関連が不十分になり、国内市場形成の問題が、ふれられずに終る結果になったように思う。著者のはしがきによれば、専門的な書物も多くの人びとによんでもらいたい、し

かしわかりにくい表現やむつかしい言葉をつかう学者が多く、それがあたかも学問的でもあるかのように考えられている、そこでここではなるべく平易な表現をとった、とある。私もこの態度に賛成である。しかし、私は、最近論議されている問題のたてかたについて、著者の見解を平易に示していただきたいかと思うのである。

ここで、ひとまず本書の特色と難点を示したから、つぎに個別的な問題点にたち入りたい。

三

まず著者の「商業社会」という概念からとりあげたい。商業社会という用語は、六七、七九、八〇、二九〇頁などにみられる。

著者は享保期に商業社会ができたとする。「このころようやく全国的規模をもって、商業社会ができて、商品需給の経済法則によって、価格が決定されるようになったからであるが、米価の下落は、武家経済にとってゆゆしい問題であった」（七九頁）。また徂徠の「物の値段も、遠国と御城下とつりあっている故に数百万人の商人一枚となりたる勢」という言葉を引用して、為政者の命令では物価を左右することができなくなつたとし、「商業社会が成立して、価格決定の機構ができあがつたことを意味する」（七九一―八〇頁）という。また「商業史の立場からみれば、江戸時代に、全国的な規模で商業社会が成立していたにもかかわらず、幕藩体制と、それをささえる身分制度を、そのままにして、商業社会の発展に対応しようとしたところに、いきづまりの根本があった」（二九〇頁）。かならずしも意味は明確ではないが、著者は「商業

社会」を、全国的に商品流通があり、需給関係で価格が決定されるようになった段階の経済社会、と規定しておられるようである。全国的流通と需給関係による価格の決定の二条件だけであれば、近世までの商品流通についてもいえることであり、商品生産の支配する段階の国内市場の形成を意味するのであれば、国内市場の形成をあまりにも早く認める見解であるといわねばならない。私の考えでは商業社会という用語を用いたため、かえって前述の段階論、商品流通の性格、国内市場の形成等の問題がぬけおちる結果になっているような気がする。概念の問題は、用語の撰択の問題であるよりも、方法の問題であるといわねばならない。

享保改革について。著者の考えはつぎのとおりである。十七世紀後半に確立した幕藩体制は、元禄期にいたり、いちおう安定して、繁栄をみせたが、幕府財政の悪化を、通貨の改悪できりぬけようとしてインフレーションの悪循環をひきおこした。吉宗は徹底したデフレ政策をとり、財政の緊縮につとめるとともに、米の増産をはじめ、農家の副業としての地方産業の奨励にのりだした。武家本位の政策がとられ、統制経済の人為政策をかざして、商業社会の需給法則にぎりこんだにもかかわらず、商人のレジスタンスにあって、晩年には、ついに統制を撤廃することになった（以上七九、八〇、二〇〇、二〇一頁の要約）。以上にみられるように、それ自体けつて誤りではないが、幕藩体制社会の構造的変化から説明するよりも、現象的な説明になっているのが、気になる点である。全体的な経済構造の変化に考慮を払った上での説明になっていないのは、最近の享保改革の研究（大石慎三郎、辻達也氏その他）や山崎隆三氏の物価史研究を参照していないからであると

思われる。なお、これと類似の叙述が散見されるが、指摘は省略する。

戦前の経済史研究が経済制度史に重点をおいていたことは周知のとおりであり、近世史の把握にあたって、貨幣経済の進展と領主財政の窮乏とを大きい柱としていたこともよく知られている。戦後の研究は生産部門の研究の発展にもとずいて、生産諸力の発展、商品経済の発達を基軸にしている。本書においても執筆者のちがいによるのであろうか、叙述をみてみると、その背後にある思考方法に、おおむね右にみられるとき基本的な態度のちがいを感じさせる箇所一再ならずゆきあたった。竹中教授が全文を統一された由であり、文章上は比較的よく統一されているように思うが、そうした思考方法のちがいがらくる微妙な差を感じないわけにはいかなかった。たとえば専売制度の説明でも、主として財政難の観点からなされている。近世の総論としての第一節商業政策と商業社会では、商品流通の面での幕藩体制の構造変化の観点が導入されているのに、専売仕法(二節)の叙述では、財政難と専売仕法の観点がぬかれ、個別領主権の自主化とか、幕藩制の構造的矛盾という観点がでないといった事態もみられる。さてつぎに、もう少し小さい問題点を二、三あげておこう。

大阪入荷米の数字は、年間三〇〇万石で天和年間の全国の産米三、〇〇〇万石の一〇パーセント(二四六頁)としたり、享保初年の大阪廻着蔵米は八、九〇万石(二七三頁)に達したとある。享保頃大阪入荷米は約一〇〇万石と推定されている(三井文庫編『近世後期における主要物価の動態(二頁)』)のは、ほぼ一般の理解と思う。また明和三年に一四一万石余、文化期に一五〇万石というデータも

あるが、十七世紀後半の天和期に三〇〇万石という数字は理解に苦しむ。

経営史に詳しいことは本書の特色をなすことは前記のとおりであるが、三井大元方を「持株会社の組織のようなもの」(二二七頁)とするのは不適當である。これは中田易直氏の規定(『三井高利』二五九頁)に従ったものと思われる。三井大元方は合名会社的な結合をなしており、傘下諸事業に出資し、利益を吸収する関係にあったが、傘下諸事業に対し大元方は無限責任をもっていたとみるべきであり、株式所有による企業支配の形ではない。持株会社のもっとも実質的な点は、持株会社が出資を限度とする責任しかおかないで、企業(株式会社)を支配する点にあるから、大元方は持株会社のもっとも基本的な要因を欠いており、「持株会社のような組織」と表現することは、そもそも無理である。

第五九回幕末外国貿易の推移(二八一頁)のグラフにおける縦軸の単位は二けたたちがっているのではないか。たとえば慶応元年の輸出額は一、八四九万ドル(第三表、二八二頁)であるのに、グラフでは一八万ドルあたりになっている。

以上、精粗不定のまま、本書に対する批評を行なったが、くりかえていえば、諸現象の整理にあたって、それらを全体的展望との関連においてなざるべきではなかったか、という点につきる。そのさい、学者はそれぞれ自己の史観をもつべきであるから、主流的な見解に従う必要はない。しかし、著者の見解の大綱がよみとれるような形で諸現象を位置づける必要があるだろう。この点について、本書の「商人の企業精神」をかりて私見をのべてみよう。

商人の企業精神については、きわめて好意的な評価が与えられ

ている。著者は近世初期の豪商の武士的な気概、冒險商人の豪奢に對して、本商人の合理精神を多面にわたってとく。他方、偽滿的な功利主義、卑屈な忍耐についても指摘する。こうした商人の精神状況の雑多な側面をどのように理解したらよいのか。いろいろの面が指摘され、しかも相互に矛盾する側面がある場合、なんらかのイメージを画こうとすれば、なにかを軸にそれら諸側面を位置づけなければならぬ。そうした意味で、それぞれの商人がおかれていた時期や状態、経済の一般事情および一般事情の個々の経営にとつての意味がとわれなくてはならない。同じ大商人でも呉服・両替を主業とした三井家と高利貸に専門化した鴻池とでは、あらかじめ意識のあり方はことなる。まして問屋商人や在郷商人にまでなれば、非常に異つた情況にたたされてゐる以上、相違があつた性格をもつていたと想像される。商人意識の研究も、そうした点までほりさげて研究する段階にきたように思う。著者も、享保期ごろから家訓・店則が作られるようになったとし、「武家財政のたてなおしをめざした享保の改革によつて、受難期をむかえた町人は、組織をととのえ、堅実な経営をもるための防衛体制として家訓・店則を制定した」とみることができ、「(二〇三頁)と企業精神の保守化が一定の時点で発生したことを認めてゐる。このような体制的な、段階的な理解が広く採用されていれば、本書の意義は一段と大きかつたであらうと思われる。

(一九六六・二・一七)

(A5判 三一〇頁 索引四頁 昭和四〇年一月 ミネルヴァ
書房刊 定価 九六〇円)

(同志社大学助教)

富岡次郎著

イギリス農民一揆の研究

飯沼二郎

1

総計七〇ページを超える本書を手にして、私は、一〇年の歳月を費して遂にこの研究を完成しえた著者の感慨が、どんなに大きいものであつたかを、思わずにはいられた。若き日に、全身全霊をもつて打ちこみうる課題と時間と体力とをもちえた研究者は幸いである。おそらく、今後、本書は、富岡氏自身の生涯における一つのモニュメントとなるとともに、また、日本の西洋史学界全体におけるモニュメントともなるにちがいない。

富岡氏が、この研究に従事しておられた一〇年間に、日本はずいぶん大きく変化した。とくに、敗戦直後の一〇年間についての評価の変化はめまぐるしく、あの時期は、日本人が自分の心を、民族の心を見失つていた時期なのだという考え方が、最近では、むしろ、支配的になりつつある。しかるに、富岡氏は、敗戦直後の一〇年間を、自己の人格の形成された時期、すなわち自分の心のつくり上げられた時期として、その時期と現在の自己との直接的な連続性を、はっきりと肯定される。そこに、本書を一貫する基本的な性格がある。まず、著者自身の口から、このことを語つ